

パープル

第44号

高村昌憲 個人誌



目次

パープル 第44号 目次

高村昌憲・個人誌 <Takamura Masanori : Kojin-shi>

詩

時間を聴く	高村昌憲
ホトトギス	中平 耀
シジュウカラ	中平 耀
ハクセキレイ	中平 耀
泣く	中平 耀

翻訳詩

アラン『ガブリエル詩集』（十一） 高村昌憲訳
少し悲しい夢
異教徒の詩
釣り人
冬の到来

評論

初期プロポ断想(二十七) 高村昌憲
1 もしもフランスが病気なら
2 交霊術
3 本能と情念
4 金科玉条

編集後記

<表紙の写真は、スイトピーの花々である。>

時間を聴く

時間を聴く

高村昌憲

秋が深まっても蝉の鳴き声が聞こえて来る
最早音の無い世界は永遠に訪れないだろう
思えば色々な噪音に耳を塞いできたことになる
母や父や弟や妻や娘たちや友人たちの声を思う

女流ピアニストのリサイタル会場での出来事
有名なモーツァルトのソナタを弾こうとして
今にも鍵盤にしなやかな指が触れようとする
場内の沈黙を突いて出しゃばってきたアンダンテ

どれもこれも耳を塞いで来た罰なのだろう
今では言葉にならない単音の流れの中にいる
私の最終楽章はケツヘル三三一番のソナタを追う
私の体内を流れる行進曲の通奏低音が鳴っている

それまでに聞いたことがなかった音の連続
通勤電車の中で聞いたモーターが発する音
沈黙が静寂でなくなって来たので独りの時間を聴く
誰も喋っていないのにマイクロフォンから流れる音

動くものや流れるものには音があるに違いない
人間にも静止している時がないから音が出て行く
流れる川や雲や電気にも音が出ているに違いない
私は生きる証しとして体内を流れる時間を聴く

ホトトギス

ホトトギス

中 平 耀

——ホッチョツツキッタア……

——ホッチョツツキッタア……

なにごとかを一心に思ひつめたやうに、
空気をひき裂いて、
一氣に吐き出す。

移り住んだ多摩丘陵の丘のまはりで、
春の終り頃から夏にかけて、
終日ホトトギスが啼く。

むかし亡くなつた母が言つてゐた、
上州の山奥ぢやかう啼くんだ。

——ホッチョツツキッタア……

いつたいだれがだれを包丁で突つ切つたのだらう。
百姓の嫁にまつはる悲しい昔語りに由来するのか。

魂迎鳥（たまむかへどり）ともいふ。

お盆の先觸れ鳥か。

あの切羽つまつた啼き聲は

一時の激情であやめてしまつたことを心底悔む

なにびとか名もない人の

魂の叫びなのかもしれぬ。



丘陵の緑

シジュウカラ

シジュウカラ

中平 耀

毎日窓の外の槿の枝に来て、
チッチ、チッチと鳴くシジュウカラよ、
この季節いつも番ひでやってきて、
チッチと鳴いてはどこかへ飛びさつてゆく。
おまへたちにも縄張りはあるのだろうか。
庭にははかに鳥を見ないが……

人にも自分だけの實に小さな領域がある。
飛ぶかはりに人はそれぞれ
何か譚の分らぬ重たいものを内にかかへて
獨り沈潜するのみ。
大いなるものの手によつて額に書かれた
見えない〈天命〉の二文字を感じながら。

シジュウカラよ、
毎日槿の枝に止まりにくるがいい。
おまへたちの屈託のない出現は
人生といふ私の不出來な作文のいつ時の讀點だ。
いずれ最終行の句點を打たねばならぬ日がくる。
だから毎日姿を見せるがいい。

ハクセキレイ

ハクセキレイ

中平 耀

斑に雪のとけた野に降り立ち、
白い頬に白い胸、羽の白い線を見せ、
尾をピンとのぼして軽やかに跳びはねる
美しい鳥。

ハクセキレイよ、
おまへの気品ある姿は
今はもう見ることもない往時の貴婦人を思はせる。

おまへはどこからやつて来るのか。
その凜とした立ち姿は
森の奥處（おくか）に静まる見えない神秘の領域の
清浄なるものをひととき垣間見せてくれる。

おまへのその澄んだ目には
私たちの住むこの猥雑な世界も
綺麗な自然の一風景として映つてゐるのか。

おまへは超然と跳びはねてゐる。
無垢なるものよ、
美しい幻よ。

泣く

泣く

中 平 耀

東京からかけつけた孫娘が
聲を忍ばせて泣く。

十七年ものあいだ病床にあつた彼女の祖父は
もうをとといからこの世にはゐない。

ずっと夫を看取つてきた腰のまがつた私の姉は
遺族席で前かがみになつてうつむいてゐる。

坊さんの
いつもの意味不明の讀經のうなり聲……

その中にあの孫娘の
聲を殺した嗚咽が……

大叔父の私は
いたく心を揺さぶられた。

ALAIN

POÈMES À GABRIELLE



INSTITUT ALAIN

LE VÉSINET

2001

少し悲しい夢

何と！ 今では半分蝕まれた月が
私たちの短い時間と 待っていた空しい日々と
接吻のない月々をこの大空に書いているの？
私たちの落ち着いた感覚にあなたは
私たちの取り乱した嘆きの後で不実な月が
空しい潮で膨れるように眠りを与えるの？
恋人同士を掻き立てるこの生き生きとした衝動の後で
柔らかに触れる地点にすべてが戻るの？
それはあなたの航跡の中で迷っている小舟で
あなたの移り気な顔に従っているの？
親しい微笑みを浮かべている恋人は
雷雨になって 肉体の波間の中で回転して
幸福そうに呑気に眠る子供の中で
乳白色の海のように平らになれるの？
そして自我はこれらの血の波に酔い
もっと大きな海へ運ばれていく死んだ天体
あなたの純粋な法則だけに従って行くの？
そして空しく嵐が要求する平和は
四季と同様にこの世からやってくるの？
愛すること 眠ること 夢見することは
物思いに耽った海の大きな船のように
相次いでやって来る波を砕く水平線にあるの？
この世のものならぬ食事で満腹になった私は
幾つもの月になって大空に戻ってくる無声の神と
私に聞こえない春の声に感謝する
私の親愛なる春は青くそして金髪で
あなたの柔らかい髪と大好きな窪み
あなたの真っ赤な血とその激しい流れ
あなたの泉の音とか不吉な寒い朝に従って
あなたは私の執拗な嘆きを受入れる
おゝあなたは私の宇宙であり森であり豊かな髪だ！
あなたの腕は柵 私の素晴らしい監獄だ！
眼は私がちらっと見た大空だ！ 口は私の糧だ！
あなたは偉大な自然を受け継いだの？

無感動な力と鹿毛色の光線は
思考しない盲目の愛の網の中で
冬と春と私たちが抱き締めた魂を
謀反の心配もなく耐えていたの？
私は夢想して あなたの微笑みの閃光に答える
水の底は透明であるが 人はその底を見ない
悲劇が生まれている湖の深淵は公平で
私が權で打つと大きな鏡が震えている

しかし精神は苦い溜息に目覚めながら
簡潔な言葉で私に言う「あなたは海を愛していないの？」

(ガブリエルへ 一九三〇年一月二一日)

異教徒の詩

あなたの手は注意深く私の項に愛を語っていた
私は物思いに耽ったあなたの姿がその時
如何なる物も動かさないように見えるその神秘に驚き
全てが決して受け取らずに与える原因になっていた
おゝ絹のような睫毛の策略よ！　そしてその肩の
柔らかな曲線よ！　愛撫で狂ったような横顔よ！
それでも女は静かに　そして強い男を待っている

あなたの金色の装飾を嗅ぎつけるのは美食家
平然としている野獣　その力の確かさ
そしてその毒舌は享樂を貪り
そして拒んでいる！　おゝ森の妖精の遊びよ
牧神が王の愛撫を真似ている時
満足しているその眼は全ての物を拒絶しており
薔薇の花びらを怠惰に噛んでいるのだ！

このようにしてあなたは見知らぬ道に迷い
私はあなたの両手しか愛さないと誓っていた

(一九三〇年一月三十一日)

釣り人

私は燃えるようなそれらの頁からあなたの全てを知り
大変に用心深い文章もその炎によって乱れ
口づけと愛撫を限りなく蘇らせている
その魂は別の魂と接吻し 運命に挑み
私たちの肉体の間に海嶺を置いている
そして時として香気が私の鼻孔を広げ
肉体は崇められ 孤独な私のために思考し
経帷子の下の穏やかな春を暖め直し
雪から白い顔までが清純さを欠いたしるし
私には何が欠けているの？

殆ど何も無い！

あなたは居る

私の二本の腕は夜の中で空しくあなたを探す
私は夢見ていた.....

目覚めは悲しい一瞬

再び暑さが私を取り巻き私に触れる
風味あるものが熟し.....

しかしそれは私の口でしかない

存在するものは長く 喜びは温かく
私に軽く触れて自己を知る.....

それは私の欲望でしかない

あなたのいない空虚に私は幾つもの思考を投げ入れ
風に運ばれた金色の木の葉のように
再び愛や遠い夏のことを語っている
そして陰鬱な大嫌いな深淵の上では
無敵の炎が消えた表情をしながらも
湯気が立つこれらの黒い伝言の全てが心に触れる
白い上の黒い灰はあなたの両眼の象徴
騒がしい心に震えるのは細長い道筋
私が遠くに放り出して引き上げるのは哀れな網

非常に弱くて岩が破いて仕舞う網
そして営々として何時までも作り変える希望

あなたが愛人の両手で戻すことができるのは
美しい緯糸で織られた巧妙なひも
あなたの体は 愛する思考で香気が満ちた巢

(ガブリエルへ 一九三〇年二月七日)

冬の到来

恐ろしい風と空から降る涙の間に
蜂蜜の味がする冬の柔らかな太陽
かざした手のように暖かい光線は
薔薇の蕾が眠る森から放されていた
余りに速い！ 決して花が咲かない寒そうな希望
拳で殴るように冬が顔を叩いている
素早く確実に 骨のような大地の上で鳴っている
自然にはもう踊り子の優雅さはない
自然はゆっくりと希望を前進させたり後退させる
既に朝が夜の陰からはみ出している
しかしその光は激しく 貪婪な深い穴を
蒼白い大空に掘っているのは冷酷な大気
両眼は その底まで明るくする優しい眼
しかしこの光が生まれる暗い深淵よ！
おゝ意味の無い透明さと明るすぎる純粹さよ！
あゝ！ 全てが読めて私の気に入るようになり
この水晶の中には 優しい奥深さが輝いている
しかしその表面は固まり 私の情熱を凍らせる
私は遠くの蒼白いあなたを認める おゝ私の星よ
愛に溢れた眼差しとヴェールを取った伝言
あなたは大変確実に帰り 大変に生き生きとして輝く
しかしあなたの熱は近く あゝ私にはそれが無い
再び閉じられた花冠でできた衣服
金色の昆虫はそこで愛した屍を探し
血の嵐が生んだとどろきは大変に近く
踊っているような波の上には狂った心
そして私が知らない唇の深い口づけ
あなたは私が崇める怪物を知らない
海の渦巻という最高に美しい逆流
深淵と隠れた太陽の明かり
黒い太陽 私の人生の声を聞く燃えるような渴き
それら全てを私は失った あなたの泉は心を奪われ
私の泉と混じり合い 絡み合って
体を曲げた口づけは誓いよりも力強い

戸外の私の体の表面は テーブルのように簡素で
空しい太陽しか感じない この冷酷な大気よ

(ガブリエルのために 一九三〇年二月十日)

1 もしフランスが病気なら

フランスという国が病気であったなら、如何なる現象が起きているのでしょうか。アランは「危篤状態だ。長く保たないだろう」とフランスという病人を診ている医者 of 独り言を書いて、一九〇八年四月五日のプロポを始めます。医者が病人に薬を売りつけるのは、昔も今も変わらないようです。又、フランスも日本も変わらないようですが、勿論、誠実な医者も多くいるでしょうから、そんなにも心配するようなことではないかもしれません。しかし人数は少なくても、やはり所謂悪徳医者もいるのです。その原因は何でしょうか。それは監視所の人間を間違っただからである、とアランは言います。

「医者たちは、病人であれば十分に愛しますし、先の尖った帽子を被った病人たちの一人ひとりが丸薬の缶を売りつけられているのを私は良く見ます。しかし、医者たちの中にも誠実な人が何人もいることを私は知っています。彼らが汚れて真っ黒になる原因は何処から齎されるのでしょうか。それがやって来るのは、監視所の人を間違っただけだからです」。

国家や地方自治体には色々な監視機関があります。会計検査院は国家予算の無駄な支出などを監視しています。県教育委員会は学校の活動を監視しています。労働基準監督署は労働者の就業実態などを監視しています。これらは各々が、定められた領域の活動を監視する機関です。様々な機関の中にも、その活動やお金や働く者を監視する人がおります。外部監査人の公認会計士であったり、内部の監事などです。暴走や停滞や間違いを発見する人々です。行き過ぎや怠慢や錯誤を発見するために監視する人の選択を間違えると、組織は病気になるとアランは言います。そういう意味でもアランにとっては、圧制とか独裁は最も憎悪し嫌悪したものの一つでした。特定の人間を暴走させない社会が重要です。病人に沢山の〈丸薬の缶〉を与えて儲けようとする医者たちを監視する人は、適切に働いているのでしょうか。

残念ながら我が国には、そういう監視機関は殆どが機能していないように見えます。つまり人間の体内に譬えれば、悪の根源である病原菌を退治する白血球の役割が殆ど機能していないのです。その結果、不正や怠慢や無気力という病気が巣くっているようです。赤字で病院が閉鎖されないために、沢山の薬が病人に与えられているとすれば、最早犯罪に近い行為です。何故なら人間を間接的に殺すことになるからです。病院や学校などは本来、儲ける処ではない筈です。そういう機関に効率性を導入させた政策そのものが、既に監視人の不在を証明しています。

又、一日八時間労働を守らずに、労働基準法の趣旨を弁えないで長時間労働を可能にする脱法行為が日常化している企業も少なくないようです。労働は本来、生活を豊かにするためのものであるのに、長時間労働によって人間を疲弊させています。最悪の場合には自殺する者も出てきます。これも人間を間接的に殺しています。我が国の毎年の自殺者数は、近年になって約二万人から約三万人に増加しています。この人数は、交通事故死亡者数の約三倍です。

人間の生活は量よりも質が大切です。幾ら長生きしても、寝たきり老人として長生きするの

では、やはり人生の核心や本質を喪失している場合が多いと思います。勿論、俳人の正岡子規のように病床に伏せていながらも、なお創作し続けて立派に生きた人間もおりますが、その様な人間は例外中の例外でしょう。人間の生活の質を良くする方法には、やはり自然や昔からの健康的な生活が重要であることをアランは言っています。病人になっていると見做したフランスという国を治療する医者たちのことや、その治療についての感想を、アランは次のように述べています。

「友人のフランスは偉大です。もしも私がお前にそのフランスの場所に美しい夜を与えたなら、そしてもしもお前を小鳥たちが沢山いる小さな森の端にある小さな丘の斜面に降ろしたなら、そこからはゆったりと流れる河が見え、霧に包まれて町は煙っていて、大地は犁で耕されて黒褐色をしていて、お前は美しい朝を毎日見るでしょう。枯れる花瓶の花とは違う花を見るでしょう。実を結ばない花の情熱ではありません。...（中略）...解剖を行っていた階段教室から出てきた医学生が次のように言っているのが聞こえるようです。「人間は腐敗するしかない」。

大都市はお前が聴いたコンサートや夜の時間を忘れる催し物とは別のものを与えます。それ自体が古くからある研究所で、全てがかび臭く、沈む夕陽は後光のように見えます。お前は、今は大衆の流れに従いなさい。ビュット＝ショーモン公園（1）まで行くが良い。お前は最高のものを見るでしょう。市内電車が唸りを上げて行く通りから二歩目に建つ七階建ての家の真ん中で、お前は密生した短い草で覆われた丘の頂上を見ます。その頂上には全く手つかずの雛菊の花が咲いていて、古代ケルト時代のドルイド僧（2）がいた時代のようなようでした」。

病人を治療するには薬は有効です。人生の時間を長くしてくれます。しかし、自然や昔からの健康的な生活は、人間の生きる質を高めてくれます。〈手つかずの雛菊の花〉や〈古代ケルト時代〉の生活も人間の精神という質を高めてくれるのです。（完）

（1）パリ北東部の十九区の高台にある公園で、第二帝政時代に整備された。

（2）古代ケルト族の祭司で、教育や裁判にも携わった。

2 交霊術

手品師の技を奇跡と呼ぶ人は殆どおりません。何故なら、その技には必ず仕掛があると信じているからです。その仕掛を正確に説明出来ないとしても、それは手品師が上手に隠しているからで、決して奇跡であると信じません。何故なら奇跡には仕掛や因果律を超えた、説明出来ない部分があると信じていることでもあるからです。アランは一九〇八年四月十六日のプロポに書いています。

「手品師が一瞬の動作で籠もろとも生きた鳥を消したり、手に持っているシチュー鍋から生きた鶏や兎を取り出したり、あるいは袖をまくり上げた後で長さ十メートルのスカーフを観客のポケットから取り出すのを見ると、出来事の本当の状況が分からなくなるのは明らかです。少なくとも誰もそれらが奇跡であるとは言いません。何故なら普通のやり方で手品師は動いているのであって、単に上手に隠すことに気を配っているだけであると誰もが知っているからです。」

それに対して奇跡を信じる人々は、譬え手品師と同じ現象を見ても、それを奇跡であると信じて仕舞います。フランス南西部のルルドの泉から湧出している水は、数々の難病を治癒したことから奇跡の水と言われています。事の始まりは、一八五八年二月十一日に十四歳であった少女ベルナデット・スビルーがルルド郊外のマッサビエルの洞窟のそばで薪拾いをしている時、初めて聖母マリアと出会ってこの泉を知ったとのことでした。フランスのみならず世界中で奇跡の水として有名です。カトリック教徒にとって、ルルドは聖地になっていて、現在でも有名な巡礼地になっています。

しかし、奇跡に対して慎重になっている者は、奇跡の水を分析しようとします。その結果、水素水であったことが判明しました。科学的に分析して理解出来たのですが、それでも奇跡を信じる者は多くおります。何故なら、〈奇跡が起きないようにする時が幸せ〉であるからです。不幸な時は奇跡を願います。しかし、幸せな時は奇跡が起きる必要がないのです。

「精神を呼び起こしてこの世とは別の世界の徴を探す者たちは、この様に考えて上手く自分を守ります。まさしく彼らは慎重であることを信用しません。そんなことは望みません。彼らは奇跡を望み、希望し、期待します。奇跡が起きないようにする時が幸せです、その時は人間の運命、最善の正義、そして私たちの感情の中にあるより純粋なものとしての永遠性についての考えを確信する時です。」

奇跡を永遠のものにするのは不幸な者ではありません。カトリック教徒として幸せになっている者が、奇跡の永遠性を確信しているのです。この逆説は、人間の幸福が奇跡を超えるのを証明しているとも言えます。幸福の者は、奇跡に驚嘆しません。そういう意味では、奇跡を当たり前のこととして理解しているのです。しかし、交霊術者は昔の不幸を説明しなければなりません。不幸がなければ奇跡も無いからです。交霊術者は、幸福な者の昔の不幸を、言葉巧みに思い出させる必要があります。幸福になれる筈が無いと絶望した日々を、現在の幸福な者の脳によって思い出させる必要があります。

「もしもこれらの観念（永遠性についての考え）がなかったならば、彼らは曲芸師の演技とか

手品師の業とか立派な物理学者の単なる実験を見るのと同じ眼で不思議な出来事を考えるでしょうし、証人にもなるでしょう。何故なら結局のところ、私たちが理解しない現象には事欠かないからです。その時の私たちは、時計がカチカチいう音を聞く子供に似ています。私たちは目覚めます。喜びます。見抜こうとします。驚きます。しかし、心の底まで動かされませんでした。それらは決して交霊術者を動かす出来事でないのが明白に分かるのですが、交霊術者はそれらに説明を与えます。つまり胸の中に宿っている昔の古い観念や古い夢が、何時も脳みそに蘇って来ようとしているのです。」

この様に書いてアランはこのプロポを終えています。交霊術者は言葉と脳と科学を巧みに利用します。この世には合理的に説明出来ないことは幾らでもあります。時計の中を見たことがない子供は、カチカチいう音が不可思議なものとして受け取ります。しかし幸福を実感する者は、それを言葉で説明しようとしません。何故なら、それは不可能であることを知っているからです。〈脳みそ〉で分析しようとしません。何故なら、〈胸の中に宿っている昔の古い観念や古い夢が、何時も脳みそに蘇って来〉ることはないからです。そして、科学によって理解しようとしません。何故なら、時計の中を科学に基づいて調べても、幸福になれないことを了知しているからです。奇跡は幸福と共にあるのです。従って、ルルドの水の奇跡も、奇跡であるためにはカトリック教徒であることが条件になっている所以です。（完）

3 本能と情念

ユージェーヌ・ブリュー（一八五八～一九三二）は、演劇革新運動を行ったアンドレ・アントワーン（一八五八～一九四三）が一八八七年にパリに創設した自由劇場の代表的な作者の一人です。社会問題を題材として戯曲作品を創りましたが、コメディ＝フランセーズ初演の傾向演劇「シモーヌ」は痴情による犯罪が主題のため激しく非難されました。その他の作家も、浮気した妻を殺す夫が主題となった作品などを創りましたが、アランは一九〇八年四月十九日のプロポでこれらの殺人について論じています。

「性的欲望には、動物の裡にも同じものを見ることが出来るように、殺人にまで行き得る激しい何かがあるのは確かです。文明化された男が自分の妻を殺すのは、多分この衝動があるからです。しかし、別なものも多くあります。都会の男の裡には、欲望はそんなにも強くありません。人間の意志は、自尊心とか恐怖心によって支えられていさえすれば、容易に勝利を収めます。自分の妻を殺したこの芝居じみた夫は、五月蠅くしているよりも寧ろ欲望に抵抗することが出来るのは確かでした。文明化された人間は、何時も大変疲れていて、そこでの美德には大変飽き飽きしています。素晴らしいこととは、情念という雷雨が大変良く稲妻を放ち、欲望が混じることもなく雷を落とすことです。」

雷が落ちるのは、必ずしも性的欲望という本能からではありません。自尊心を傷付けられたと感じた時、あるいは恐怖心からじっとしていられなくなった時に、人間は激昂して行くのです。決して本能ばかりからではない、とアランは言います。夫婦間の親密な関係においても本能的に癪に障ると「今の言い方は何だ！」と怒鳴って仕舞います。原因は横柄な言い方にあり、決して重大な原因があった訳でもなかったのです。

又、強姦を企む男は、下等な欲望である本能の言いなりになっているのは明白です。しかし、妻に浮気されて復讐する夫の行為は本能からではありません。嫉妬し復讐する感情は、本能からは乖離しています。その夫の欲望の温度を測る体温計や、血液や気分の流れを測る速度計があって、その体温や速度を測れたとしたなら、その温度計は平熱であり、速度計はゼロを示していることをアランは確信していると言います。嫉妬は、思わず興奮して湧出する感情ではないのです。嫉妬が傷付け苛むのは心であると言われていますが、それは大変に上手い言い方である、とアランも同調しています。心の問題は、心で解決するしかないように思います。つまり一瞬の激情とか逆上する性質の側面を持った本能的感情や気分に従うものではないようです。時間をかけて心を作り直す必要があります。私たちの人生は、心次第で幸福にも不幸にもなるようです。妻の浮気相手に嫉妬して妻を殺す者は、妻を殺したいと願ったからです。そして自分の死も願っているからです。雷を落とすことがあっても、妻を見る眼を変えることは可能です。妻を別の感情で知覚することは可能です。殺したいと願う心を変えて、行動し、生きることは可能です。夫の嫉妬を理解するには、夫の幸福だった時を先ずは理解する必要があります。何故なら幸福がない処には嫉妬も生じないからです。

「廃位した王の激昂を理解するには、何とか王に在位するのを喜びに感じる何らかの観念を手

に入れなければなりません。同様に、もしも私（アラン）が嫉妬の結果を理解したいなら、酔い心地にさせる何らかの幸福を想像しなければなりません。その時、それは剣を振り上げる天使であって、動物ではないのです」と書いて、アランはこのプロポを終えています。天使の感情である情念で剣を振り上げることです。強姦を企てるような下等な欲望から剣を振り上げるのではないのです。前者は妻も自分も生かしますが、後者は妻も自分も殺すこととなります。〈見ることは、見たいと思うことです。生きることとは、生きたいと思うことです〉とアランは言います。嫉妬の中に悶々とする心から、広い空を生きるために行動することです。アランのプロポの中で最も美しいものの一つである一九〇九年五月二九日のプロポで、アランは次のように書いています。

「行動することは喜びです。知覚することも喜びであり、それは同じことです。私たちは生きることを決して咎められません。貪るように生きます。私たちは見て、触って、判断することを望んでいるのです。私たちは世界を広げたいと思います。生きる者は全てが朝の散歩者のようです。地平線まで段状に並んだもの全ては、私がそれを望むから意義あるものになるのです。さもなくば眼の奥をくすぐる位のことではしかありません。しかし、私は自問します。そこには小径があり、樹木があります。その青い線は、私が歩く丘です。劇場で良く眼にしますが、舞台装置家が一枚の布に着色して表すものです。しかし、私たちは直ぐにそれらの代わりに、遠くへ眼を向けます。最初の計画を引き出します。私たちの周りの現実世界にとっても同じことです。広い空は、眼には青でしかありません。しかし、それは私の頭の上に広がっています。見ることは、見たいと思うことです。生きることとは、生きたいと思うことです」。

嫉妬という感情も動物的に扱う儘であったなら、生きることが困難になります。天使は人間を罰しません。動物的な感情が、天使の感情である情念へと昇華していく瞬間でもあります。心を変えるのは、まさに情念という感情です。（完）

4 金科玉条

我が国の華道、茶道、歌舞伎、日本舞踊、箏曲などの伝統芸術や伝統芸能には、家元制度があります。個人の感情や意見よりも、家元という伝統的な精神と技が優先される世界のようなのです。毎年秋に開催される我が国最大の公募の美術展覧会である日展にも、もしかしたら個人の芸術表現よりも、伝統的形式的表現が優先される分野や領域があるのかもしれませんが。従って、個人よりも組織優先の考え方が強いために、公募展でありながら組織内の権力構造とか権威関係によって社会的名誉が決定されていく実態が新聞報道によって明らかにされました。

従って、近代芸術の基本である筈の個人の尊厳を基礎に置く芸術表現が、伝統や組織に基礎を置く表現によって、大きく制限されている実態が推測されます。仮に、この実態を潔しとするなら、我が国の現代の芸術は益々社会から乖離して、有用性すらも保証され得ない虚飾化された作品群の創造に埋没するしかないと考えます。翻って職人であるなら、切れ味抜群の包丁とか豪華絢爛な着物がその存在価値を担保してくれますが、所謂芸術作品を創造する芸術家にその様な有用性は曖昧であり、殆どの作者が二流の職人以上には評価されない現状が我が国には厳然として存在しているように思います。あるいは、目利きでない鑑賞家たちによって有価証券化した作品の流通しか生まれない市場の中で、真の芸術家ばかりが疲弊して行きます。

逆に、作者が死ねば、その作品の評価額が下落するという珍現象も、既に至る所で指摘されています。この逆転現象の原因は、生存中の作家の評価が自らの作品に起因するものでなく、作品そのものとは無縁である筈の地位や名誉や人間関係に基づくものであることが容易に推察出来ます。それはまさに鑑賞家たちの見識の低さと、美を観る自信のなさとか勇気のなさを証明しています。更に、鑑賞家諸氏が目利きになるための訓練を行い発表する機会も少なく、その様な環境は偏に伝統的形式的表現の温床になって行きます。美の世界には本来、裸の王様がいることは不可能です。何故なら、美は誰にも理解が可能であるからです。しかし、美を伝えるにはやはり訓練が必要ですから上手く表現することは困難ですが、美を感受することは誰にでも出来ますし、誰にでも分かっていることです。従って、鑑賞家も作者と同じ立場で行動すべきです。美しいものは、先ずは美しいと言えれば良いのです。

「美は正しいものである」とアランは言います。作者にとっての美は、鑑賞家にとっての美と同一です。従って、間違った美は無いのですから、鑑賞家も作者と同じ立場で行動すべきです。一九〇八年四月二六日のプロポでアランは、フランスの家庭で父親が子供にいう金科玉条として次の言葉を挙げています。

「もしお前が人々の立場にあって、人々がお前の立場にあったなら、お前と一緒に人々が行動して欲しいように、お前は人々と一緒に行動しなさい」。

公募展の日展の話に戻します。審査員は何故作者ばかりなのでしょう。優れた作品は描いた者でないと解らない、と信じているのでしょうか。伝統と形式という要塞に囲まれて擁護された象牙の塔にいないと美は理解出来ない、と信じているのでしょうか。学生やサラリーマンや主婦に美は理解出来ない、と信じているのでしょうか。もしもそういう先入観を持った人々の集団であるなら、我が国の芸術はガラパゴス化されて発展することなく、やがて化石化し風化して行っ

て仕舞います。芸術が風化して行って、全てが博物館や美術館に入って仕舞っても社会は存続していくでしょう。しかし個人の眼で見て、美しいもの正しいものを把握し切れなくなる現象が危険であると考えます。そういう意味で、個人の尊厳を堅守し切れなくなり、健全な人間の精神を育む見識を喪失させるようになる現象が危険であると考えます。そういう危険を回避するために、外国人の公準しか信用出来なくなる現象も危険であると考えます。何故なら、自らのことを自らが判断出来なくなる先に用意されているのは、真の喜びや楽しみを忘却した不幸と不信ばかりであるからです。アランはこのプロポを次の様に結んでいます。

「金融業者は証券取引所で賭けをしています、殆どの賭けに勝ちます。他の人が知るよりも早く知った重要な情報によっているからです。彼を見倣ってご覧下さい。「もし誰かがあなたのカードを見てから賭けたとしたなら、あなたは満足していられますか」と彼に言ってご覧下さい。彼は次のように答えるでしょう、「誰もが私のように情報を待ち伏せして待っているし、自分の手の内は隠して、私のものを見ようとしているのは分かっている。出来るものなら私の皮を剥ぎたがっている。私はそれに同意する。この闘いは公明正大なのだ」。

これらの例から、二つのことが分かります。まず第一には、大部分の人は自分の眼で見て正しくありたいと感じています。第二には、誰もが自分の行動だけは正当化されて余分な苦勞がないようにしたいのです。モラリストという言葉は私はあなたに譲りますし、あなたの金科玉条を私はあなたに返します」。

〈自分の行動だけは正当化されて余分な苦勞がないように〉するためには、〈自分の眼で見て正しくありたいと感じ〉る外に、他者の評価が必要です。社会のあらゆる人間と一緒に行動することです。それがモラリストです。芸術家もモラリストでなければなりません。（完）

◆十二月八日（日）に東京・吉祥寺の「永谷ハウス」で開催された「風狂の会」（主宰・北岡善寿氏）の川柳忘年会に参加した。題詠「もてなし」と自由詠を三句ずつ計六句を予め投句し、当日の参加者による投票での選考が行われ、全六十句の中から各々一等、二等、三等を決定した。短歌や俳句が自然を表すのに対して、川柳は人事を表すと言われているように、その表現方法は様々である。又、短詩であるために作者の真意を十分に理解され得ない欠点を宿命的に持っている。従って今回からは、全ての投票後に、作者が一人ひとり直接自作について解説することとなり、その後で改めて投票して佳作を選考することとなった。すると従前までは思ってもいなかった作品の内容に驚嘆すると共に、重層化された解説に会得することも多かった。作品は読むだけで解るのは理想であるが、やはり批評精神を必須とする現代文学には解説や説明が重要であると痛感した。たかが川柳、されど川柳である。当日の選考結果等は、詩誌「さやえんどう」四〇号（編集発行・堀口精一郎氏）にて詳細に報告されているのでここでは割愛するが、ご参考までに私の作品だけを全てご紹介することとする。

- 1 接待と心がちがうおもてなし（題詠）
- 2 もてなしは おが付くことで〈招致〉済み（題詠）
- 3 西洋のもてなす花は〈表なし〉（題詠）
- 4 退職後上司は妻だ〈大食〉漢（自由詠・二等賞）
- 5 日展は〈初動〉が怪しい審査員（自由詠）
- 6 恐いです放射能より五千万（自由詠・三等賞）

（1句、大違い。2句、五輪招致。3句、日本の生け花には表と裏あり。4句、「太るわよ！」。5句、引き金は書道の報道から。6句、猪瀬都知事。）

◆二月八日（土）と十四日（金）に、関東地方にも二週続けて大雪が降った。東京都区内の積雪は各々が二七センチであり、一九六九年（昭和四四年）の三〇センチに次ぐ四五年ぶりの大雪であった。異常気象が問題になると、その原因として地球温暖化が取り沙汰される。二酸化炭素が増加した結果との由、文明や利便性の発達付けが回って来たのだろうと思う。人口の増加に伴う工業化等の諸現象も、少なからず影響を与えているようである。我が国の場合は、逆に最近では人口の減少が言われているが、それでも明治維新以後は相当に増加している。三三〇〇万人が一億二七〇〇万人（二〇一三年）であり、殆ど四倍に近い。因みに世界人口は十三億人が七二億人に増加し、約五・五倍である。これ程の急激な増加は、歴史的に見ても嘗て経験したことがないのであるから、天候以外に社会制度、慣習、人間の精神性にも多くの影響を与えている筈である。交通機関の発達や人間の移動の加速化を齎している。パソコンなどの機械の発達も、一人ひとりの仕事を増加させているし、更に仕事の密度も高くなっている。このために自然ばかりでなく、人間にも益々ストレスの負荷が増大されて来ている。国際化やグローバル化が世界的な協同化から、何時の間にか過当な競争社会へ変容させて来ているようである。従って最近の我が国の人口の減少を危機と捉えずに、一人ひとりの人間に視点を向けた社会形成にとっての好機と見做す考え方に注目したい。大雪が降って丁度良い機会であるから、人が歩ける程度の雪か

きに止めて、その外の場所は急いでやらずに、太陽光線でゆっくりと雪が溶けるのを暫し眺めることとした。何故なら、東京地方の雪は珍しいから、何時までも見続けられるのは楽しく、乾燥した冬の空気に潤いも与えてくれるからである。

◆四月六日（日）に東京・調布の神代植物公園で行われた「風狂の会」恒例のお花見に参加した。今年のソメイヨシノの開花は三月二五日であったので、まだまだ桜の花が楽しめるかと期待していたが、生憎と寒気が南下して不安定な天候になった。時折、雷も落ちたが、園内の大温室を鑑賞して時間を潰してから、それでも落雷注意報の中を、眺望が抜群のテラスで各々が持ち寄った酒肴で花見と会話を楽しんだ。普段なら花見客で一杯の場所と思われたが、天候が逆に幸いして、絶好な場所でありながら人影も疎らで、実に気分爽快であった。詩人の集まりには決して独裁者がいないから、一人ひとりが自由に判断しての行動になったが、皆の思いが一致しての宴会となり、記憶に残るお花見であった。風邪をひかないうちに退園して、調布駅前の「すし店三崎丸」へ行き、熱燗とお寿司での二次会に移った。当日の参加詩人は、池田高明、北岡善寿、倉田武彦、高村昌憲、富永たか子、長尾雅樹、中平 耀、なべくらますみ、原詩夏至、安川登紀子（敬称略）の十名であった。

◆四月十九日（土）に東京・高尾山薬王院有喜寺の精進料理を、五十年近い付き合いになる高校時代の友人の集まりである「サラダ会」のメンバー（八名）と共に味わった。地元の高尾で生まれ育ち、今も在住しているA氏の案内で、麓から薬王院有喜寺までケーブルカーに乗って往復した。日本一の急勾配を登って行くと、山頂付近は未だ桜や椿などの花々が咲いていて色々堪能出来た。取分け、精進料理は春の山菜や蒟蒻などの様々な食材による料理に溢れていて彩りも美しく、食べるのが勿体ない芸術作品のようであった。アランが言うように現実社会や実生活の役に立つ簡潔で単純な形に美があるとするなら、もしかすると芸術は実用性と共に発展するところに真の美しさがあるのではないかと、美味しい料理を食べながら独り考えた。

◆四月二十日（日）に岳父の生家がある山形県鶴岡市へ家族と共にいき、市内の鶴岡公園でシートを敷いてお花見をした。翌々日の二二日（火）には福島県三春町の雄大な「滝桜」を観た。「薄墨桜」（岐阜県本巣市）、「神代桜」（山梨県北杜市）と共に日本三大桜の一つである。満開の桜の花々を追っての東北の旅は初めての経験であった。考えて見れば、三八年間毎朝ラッシュアワーの通勤電車を通うサラリーマン生活を送っていた身には、とても叶わなかった贅沢な旅である。それまでは〈働かざる者食うべからず〉の言葉が重くのしかかっていたが、今後は〈動かざる者観るべからず〉を勝手に標榜することとしたい。やはり美を観て感動するには、動くことが必要のようであり、芸術家を自覚するためには旅する人でなければならないのかもしれない。

◆多くの詩人たちなどから紙媒体の詩集及び詩誌等を頂戴したが、失礼と思いながらも殆どお礼状も差し上げていない。最近ご恵贈賜った詩集、単行本及び詩誌等の表題、著者名（編集者又は執筆者名）及び出版社名などを掲載して、この場を借りて深謝する。なお、詩誌等の刊行物は最新号のみを掲載した。（順不同・敬称略）

詩集『宇津の山辺』秋山基夫（和光出版）

詩集『美学実験』藤森里美（ゆすりか社）

詩集『記憶の風』江 素瑛（土曜美術社出版販売）

詩集『世界の片隅で』大塚欽一（泊船堂）
詩集『有情無情、東京風景』北 一郎（土曜美術社出版販売）
詩集『芭蕉 古の叙事詩』山口敦子（土曜美術社出版販売）
詩集『風が運ぶもの』河越潤子（竜骨の会）
詩集『波平』原 詩夏至（土曜美術社出版販売）
詩集『道の辺に野あざみ』金 一男（日本文学館）
詩集『三行詩 在日七人詩集 赤い月』時調の会（日本文学館）
詩集『真逆のときに』周田幹雄（土曜美術社出版販売）
詩集『長老の愛した女たちの季節』安川登紀子（七月堂）
詩集『胸深くする時間』吉田定一（竹林館）
詩集『おじさんノット』倉田武彦（土曜美術社出版販売）
詩集『揺れるゴンドラ』横倉修一（土曜美術社出版販売）
詩集『韓国詩歌春秋』（増補改訂版）金 一男（日本文学館）
詩集『時調（三行詩）第十五集』趙 末雄ほか（時調の会）
歌集『レトロポリス』原 詩夏至（コールサック社）
句集『火の蛇』原 詩夏至（土曜美術社出版販売）
詩道考『山村暮鳥詩集『聖三稜玻璃』考』大塚欽一（泊船堂）
評論『廃墟の詩学』中村不二夫（土曜美術社出版販売）
『詩と随筆と評論』黒羽英二ほか（文藝軌道の会）
「樗」一号（なべくらますみ）
「現代詩研究」七二号（渡辺元蔵）
「ZOWV（ゾラヴ）」通巻三四号（正木ノリオ）
「極光」二〇号（原子 修）
「飛火」四五号（岡谷公二）
「解纜」一五六号（西田義篤）
「幻竜」十九号（清水正吾）
「人民の力」一〇〇七号（谷口 巖）
「RAVINE」一八七号（薬師川虹一）
「流」四〇号（西村啓子）
「竜骨」九二号（高橋次夫）
「騒」九七号（暮尾 淳）
「ぽとり」三〇号（武西良和）
「風樹」十五号（大塚欽一）
「ゆすりか」九六号（藤森里美）
「ぱぴるす」一〇七号（頼 圭二郎）
「ココア共和国」十四号（秋 亜綺羅）
「一軒家」三六号（丸山全友）

「新現代詩」十九号（中川 敏）

「金木犀」十四号（菊田 守）

「駆動」七一号（飯島幸子）

「さやえんどう」四〇号（堀口精一郎）

「ERA」通巻二一号（川中子義勝）

「SUKANPO」十六号（田口三船）

「アンドレ」一〇号（宇佐美孝二）

「風刺画研究」五九号（清水 勲）

「L'ARCHE」二四号（浜田 泉）

「文藝軌道」通巻二〇号（黒羽 英二）

◆電子書籍の同人雑誌「風狂」（編集長・北岡善寿氏）を今年中に発行予定である。詩や評論などの発表希望者は<masakazu330@gmail.com>までご連絡下さい。

◆「パープル」四五号は二〇一四年十一月二一日発行予定である。

高村昌憲個人誌 パープル (第44号)

2014年5月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/83370>

編集：高村昌憲

編集者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/83370>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/83370>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ